令和６年度　呉市地域ケア推進会議　摘録

日時　令和７年３月１２日（水）
１５時～１６時１５分
場所　呉市役所２階２０１～２０２会議室

１　議長の選任

大村委員を議長に選任

２　報告

(1) 呉市見守りネットワーク事業の概要と令和６年の活動実績等（資料１）

福光委員：現在，民生委員が所在してない地区が何か所かあり，その地区では情報伝達が遅れ，支障が生じるケースがある。その場合でも，地域住民から各市民センターや自治会長を通じて相談をいただき，対処している。重層的支援推進室や地域包括支援センター，社会福祉協議会の皆さまには引き続き協力いただくようよろしく願う。

(2) 認知症と共に生きるまち「認知症パッケージ事業」（資料２）

吉川委員：薬局での長谷川式スクリーニング検査について，調剤業務中での実施は時間的になかなか難しいようである。また，長谷川式スクリーニング検査のみで診断することもなかなか難しいので，引き続き実施してみないと結果は出てこないのではないかと思う。実際に診察へ繋がったケースは少ないので，今後の展開を見守っていきたい。

田奥委員：薬局での検査実施者は研修を受講しているのか。それとも説明書のようなものを読んでいるだけなのか。

事務局：事業開始前に研修会を開催し，受講していただいている。

(3) 呉市地域ケア会議等から抽出された課題（資料３）

髙田委員：支援困難ケースとして，認知症がある方で何度も警察で保護し，高齢者支援課も対応に苦労されているケースが実際にある。警察では重篤化した状態で通報をいただき把握することが多いが，重篤化する前の段階で関係する機関が手を差し伸べたり，情報共有をしたりできれば，何か解決策が見つかるのではないかという思いはある。何とかしたいと思いはあるが，様々な理由から解決が難しいケースがあると感じている。

３　議題

(1) 地域ケア会議等を通じた市全域の課題と対応について（資料４）

意見・質問なし

(2) 「地域が目指すべき姿（ビジョン）」について（資料５）

大村議長：委員の皆様には，それぞれの立場から，地域包括ケアにおける地域が目指すべき姿について御意見を願う。地域の多様な支援主体として，日頃の活動を通じて感じている地域の課題や，地域がこうあったらいいというビジョン志向での発言を願

う。

向井委員：在宅で看取りをすることの課題として，個人クリニックが在宅で看取りするためには24時間365日いつでも対応できる体制をつくる必要がある。いつでもクリニックまで1時間程度で到着できるように備えることはできないため，在宅での看取りは簡単ではない。

運動については，人口がどんどん減っており，お年寄りがお年寄りを見守る状況になっている。民生委員の方も70歳ぐらいだと若者の部類に入るような状況である。ボランティアでやっていただいているものなので，民生委員の方には頭が下がる思いでいっぱいである。このような状況の中で，呉市が目指すビジョンは実現不可能だと私は感じている。

亀本委員：歯科としては噛める、食べられるということを重要視したいと思っている。奥歯がなくて食べ物がなかなか噛めない方は，外出する機会が少なくなり，介護度が高いこともデータで示されている。入れ歯を入れる等して，とにかく噛めるようにすることが大切である。そのためには，介護保険を利用し始めたくらいの頃から健診を受けていただき，しっかり管理をしていくことが重要だと思っている。

藤田委員：呉市は，高齢者の一人暮らしや高齢者のみ世帯の割合が高く，高齢者が他者と関わる機会が少ないと聞いている。専門職が高齢者に手軽に受けられるサービスを教えてあげることが必要だと思う。薬局での脳のいきいきチェックは，身近な薬局での受検を通して認知症の発見につながる仕組みになっており，サービスの着眼点は非常に良いと思う。今後，受検者数が増加することを期待したい。

谷内田委員：呉市には認知症やフレイルの方が多い。今年は寒かったので閉じこもりがちになり，フレイルの方がすごく増えたと訪問看護で見させていただいて感じた。フレイルから認知症に進んでいくケースも相当数存在する。

難聴が進行すると認知症発症リスクが上がるため，補聴器等の補助を開始したと新聞で読んだが，良い取組であると思う。その他，健康くれ体操や百歳体操をもっと充実できるように広められたらいいのではないかと思っている。

新谷委員：普段は地域包括支援センターの方々と地域住民に介護予防の提供活動をしていることが多く，依頼を受けて講演に行ったり，体操指導に行ったりする中で，参加される方は非常に関心の高く元気な方が多い印象である。今回の報告の中で，高齢者本人の課題として，認知症やフレイルに対して無関心な方が多いということが挙げられていたので，地域包括支援センターの方々と一緒に対策を考えていければならないと感じた。

折本委員：業務で相談を受けた患者さんの中には，身寄りがなく，１人でどう死ぬかということに対して不安を強く感じている方がいらっしゃる。安心して生活するためには，生きがいを持って生きていくためにはどうすればいいか，どう人生をしまうか，ということを考える機会が必要なのではないかと思う。

河合委員：配食サービス業者が減ってきていると感じている。昨今の材料費や燃料費の高騰により，かなり厳しい状況になっているのだと思う。このような状況の中で，冷凍食品を扱う業者が増えているので，こういった業者の紹介も進めていきたいと思う。呉市と一緒にサロン等で，介護予防事業やフレイル予防について話をさせていた

だくことがあるが，この取組は年に数回しかないので，今後は知識をお伝えできる場をもっと広げていければと考えている。

宮下委員：高齢者の免許返納が進まず，認知機能低下があるにもかかわらず運転し続ける方が多くいらっしゃるという問題がある。免許返納したとしても，返納した途端に閉じこもって鬱になったり，認知症がひどくなったり，という悪循環が生まれている。この問題に対して介護支援専門員としては，福祉用具のレンタルで電動シニアカーを勧めてはどうかと考えている。今までは，電動シニアカーに乗るようになると足腰が弱るのではないかという懸念があり，厳しく制限をしていた。しかし，日常業務で見ていると，電動シニアカーに乗っている方は介護度を維持できているように感じている。電動シニアカーに乗ることで外出する機会が減ることなく，社会参加できているから元気なのではないかという仮説を立て，現在，検証しているところである。検証を通してデータを取り，介護保険課や警察と協働することで，免許返納も社会参加も同時に促進することができるのではないかと思っている。

島中委員：東部地域包括支援センターには様々な相談があり，すぐに解決に至らないことでも，解決への努力を続けているところである。東部地域での高齢者の一番の困り事は，ごみ出し問題である。すこやかサポート事業やヘルパー利用，近所の助け合いには限界がある。なお，地域との交流がある方や，周りに気にかけてくれる方がいらっしゃる方，周りに助けを求めることができる方はいいのだが，自宅に閉じこもって地域と交流がない方へのアプローチをどうしたらよいのかが非常に難しい。放置してごみ屋敷化した事例を何件も見てきている。こういった方を置き去りにしないための提案として，呉市の「こどもまんなか」とコラボし，学校と地域をつなげて幼少期からボランティア活動や地域活動に参加してもらってはどうかと考えている。地域活動を経験することで子どもたちは自信を持ち，将来は民生委員やＰＴＡ会長になりたいと発言するようになった事例があるようだ。そのため，幼少期からの取組に注力することが大切であると感じている。定年間近になってからこれからの人生どうしようかと慌て出すよりも，幼少期から将来を見据えて生きてもらいたいと思う。

花房委員：介護人材不足が本当に深刻化しており，各事業者がいろんな工夫をしてなんとか人材確保している状況である。特に島しょ部の状況はもっと深刻で，事業所数も減っている。近い将来，島しょ部では介護サービスを受けることができなくなるのではないかと感じてしまうほどである。介護報酬だけで介護事業所を運営するには限界があるが，いろんな知恵をお借りしながら運営を続け，地域の方を支えていければと思う。

平林委員：生活支援体制整備事業を呉市から受託しており，生活支援コーディネーターと各地域包括支援センターの包括的支援推進員との連携をさらに深めていくことを第１目標としている。そして，きちんと役割分担をし，それぞれの得意なところをしっかり取り組んでいければと考えている。また，ボランティア育成や福祉教育の体制を組み直して，来年度からしっかり取り組んでいきたいと考えているので，委員の皆さんと連携させていただいたり，知恵をお借りしたりしながら進めていきたいと考えているので，その際はご協力いただくようよろしく願う。

川畑委員：私が住んでいる川原石地区は斜面が多く，高齢者がごみステーションまでご

み出しに行けないため，呉市社会福祉協議会と一緒に 100 円でごみ出しを請け負う取組をしようと考えていたが，近所の方から 100 円いただくのは心苦しいという話になった。電球交換等のちょっとした困りごとを隣近所で助け合う仕組みをつくってはどうかという提案をいただいたが，動いていただけなかった。また，自治会の高齢化が進んでおり，若者に参加してもらえるよう工夫しているが，なかなか上手くいかない。人口減少が続いている中で，70 歳を過ぎても働く方が増えているので，自治会等の後継者の高齢化も深刻な問題となっている。可能であれば，本日この場にいる皆さんも 60 歳代くらいから自治会活動やボランティア活動をしていただきたい。市役所職員になかなか参加していただけないというのも悩みの種である。こういった問題を自治会長になったら全部背負わなければならないと感じられるかもしれないが，私は自分にできることでやっていきたいと思っている。昔のように，隣近所で調味料を貸し借りできるようになればいいなと思っている。

鈴木委員：老人クラブも後継者不足が問題となっているので，島中委員さんがおっしゃったように，幼少期から地域に関わってもらえるような体制をつくっていく必要があると思う。近年，地域がバラバラになり，連帯感が無くなっていることを痛感している。今後は，各老人クラブにフレイルサポーターを養成していこうという思いがあるので，取組を開始した歳には皆さまにご協力いただきたいと思っている。

田奥委員：弁護士会としては，支援困難ケースに該当する方が認知症になって自分で何もできなくなったときに，市長申し出という形で後見人となって関わるケースが多い。弁護士が後見人になれば，生活保護の申請や借金の請求がある場合には時効援用，どうにもならないときは破産もできるので，ぜひ弁護士までつないでいただければと思っている。困難な事案として，認知症の両親の財産をめぐって複数人いる子どもが対立する事案が挙げられる。親の財産は親のものであるという当たり前の理屈を啓発するような活動があれば，呉市の高齢者にとって有益ではないかと思う。

檜山委員：高齢者の一人歩き事案が非常に多いのが現状である。警察で届出を受けたら，発見するまで夜間，休日もずっと探している。そして，高齢者が何回も一人歩きして行方不明になる事案が多々ある。そのたびにＳＯＳ登録やＧＰＳ機器の購入等の説明をしている。しかし，ＧＰＳを準備しても行方不明になる方は基本的に何も持たれていない。最近はエアタグという紛失防止タグがあり，世間に普及すれば一人歩きする高齢者が早期発見され，最悪の事態が防げるのではないかと考えている。呉市には，一人歩きする高齢者の発見活動の支援や事業を検討していただければ警察としてはありがたく思う。

木村委員：救急は生活医療の最後の砦だと考えている。普段からよく民生委員や訪問看護の方，自治会長から通報していただいており，近年，通報件数が増えていると認識している。また，訪問したときには亡くなられていたという状況も，報告書を見る限り徐々に増えていると認識している。救急搬送が必要だと判断されたら，遠慮なく 119 番を通報していただきたい。引き続きご協力いただくようよろしく願う。

堀江委員：市民協働や地域協働の分野を担当している。市民協働も地域包括ケアも，地域で安心して暮らしていくという目標は一緒なのだと思う。目指す姿として「住み慣れた地域で健やかに安心して暮らし続けることができる」と記載されているが，こう

いう生き方をたくさんの方がしていると思う。本当の大きな課題は，支援者側の人手不足や高齢化のほか，助けを求めることができない方や支援を拒否される方をどう支援していくか，ということなのだろうと本日の皆さんの意見を聞いて感じた。

小笠原委員：高齢者の問題は大きく２つあると思っている。１つは認知症の問題である。もう１つは身寄りのない一人暮らしの方が増えているという高齢者の孤立，孤独の問題である。認知症に関しては，今年度から認知症パッケージ事業を開始しており，他自治体に先駆けて呉市が先進的に取り組んでいることだと思っている。しかし，事業の取組を通して様々な課題が見えてきたので，修正してより良い形にしていく必要があると思っている。そのために，皆さんからご意見をお寄せいただければと思う。

高齢者の孤立，孤独の問題に関しては，島中委員がおっしゃったとおり高齢者の問題ではないのだろうと思っている。隣近所との関係性は，幼少期からの生活の仕方や人，地域との関わり方の結果が，高齢期における隣近所との関係性に現れているのだと思っている。フレイルの問題も同様だと思っている。まだ具体化できていないが，保健所等にも協力していただき，一生を通じた健康づくりやフレイル予防，認知症予防，骨粗鬆症予防のようなことをできればいいと思っている。

人材不足についても危惧しており，呉市産業部が実施している働きやすい職場づくりや離職防止の取組，若者が希望を持って働くために何が必要なのかを考えるセミナー等に参加していただくよう，老人福祉施設連盟の方に声かけをしている。総合的な体制づくりをしたいと思っているので，引き続きよろしく願う。

４　その他

(1) 事務局より

本会議の委員の任期については，要綱では，委員の任期に定めがないものとしているが，所属団体での異動などで変更がある場合は速やかにご連絡をいただくようよろしく願う。高齢者支援課から皆様に照会をかけさせていただく予定であるので，返答いただくようよろしく願う。